

### (3) 母が教えたまいし詩歌

母織子(1897—1949)は熊六の次女である。1916(大正5)年、18歳のときに加藤信一と結婚する。そのとき父信一は30歳。雙葉高等女学校時代にカソリックに触れ、20歳頃に大病を患ったことを契機に入信した。加藤と妹にもカソリックに入信することを願っていた、と実妹久子は証言する。



母織子は開明的な考え方をもっていて、その考えを夫に対してもためらわずに主張する強さも備えていた。子どもに対しては優しく、周囲には気配りができ、社交性に富み、ものごとをてきぱきと処理する術を心得、合理的判

断をもっていたが、合理的な判断の行き過ぎの弊も知っていた。加藤家は母織子がいわば「家刀自」として差配する家庭であった。母織子を中心に、加藤と妹久子によって営まれる家庭(上写真:加藤一家、父は後列に座る。この位置関係は加藤の家族を象徴している)。父親の存在感の薄い、ある意味で「戦後の家庭」を先取りしていたといえる。

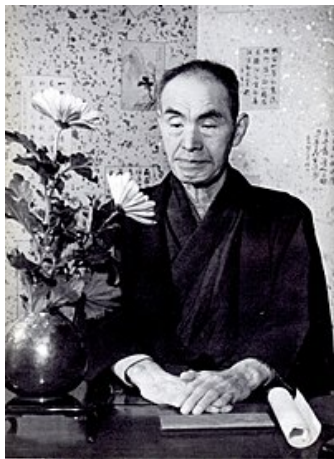
自伝的小説『羊の歌』には母が語られることが多いが、そこからは強い母と優しい母との両方の表象が立ち上がってくる。つまり加藤は「グレートマザー」としての母を感じていたと思われる。その象徴的な表現が『羊の歌』「渋谷金王町」に綴られる「夢」の件である。大車輪に押しつぶされ、大きな渦巻きに巻き込まれる夢を加藤はよく見た。この夢をユング派の人ならば「グレートマザー」——子どもをかぎりなく優しく包み込む母親であり、同時に

子どもに対して圧倒的な力で支配しようとする母親——として理解するだろう。

子どもの頃に病弱であった加藤は病の床に就くことがしばしばあった。そのときに枕元に  
来ては「浦島太郎」や「赤ずきん」を読んで聞かせたのは、母織子であった。この経験が加  
藤の読書好きの習慣をつくったに違いない。

長ずるに及んで文学を好む加藤に、父信一は不満を感じてきた。そのとき母織子は加藤を  
強く擁護した。しかし、大学に進学するときに、加藤が文学部志望であったにかかわらず、  
家庭の経済的事情を理由に、医学部に進学するように促したのも母織子であった。

母織子はまた詩歌に親しんでいた。加藤に島崎藤村や土井晩翠、若山牧水を教えた。



加藤はのちになって母織子がキーツの詩集を読んでいたことも知るのである。加藤に「詩人  
の魂」を植えたのは、間違いなく母織子である(写真:左から島崎藤村、土井晩翠、若山牧水)。

加藤は母織子を愛した。戦後、胃がんが発見されたときには、加藤は献身的に看病するが、  
1949(昭和24)年、52歳の生涯を終える。そのときの心境を加藤は次のように記した。

私はまた同時に、私自身の生涯を、母の死を境として、その前後に別けて考えるよう  
にもなったのである。その前と後で、私の生きてきた世界のいわば重心が変わった——と

いうことに気がついたときに、その考えは私自身をおどろかせた。(『羊の歌』「京都の庭」)

この頃に加藤が進めていた医学勉強のためのアメリカ留学の話は沙汰済みとなり、1951(昭和26)年にフランス留学の試験を受けることに変わったのである。母織子が早逝しなかったら、加藤の人生はまったく違ったものになっていた可能性がある。